
百物語

奏いろは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百物語

【著者名】

奏 いろは

N43350X

【あらすじ】

とある所で百物語をする子ども五人がいた。暗闇と揺らめく蠟燭の光の中、話はどんどん進んでゆく。最後に起こったことはいったい…？

話が進むにつれて明らかになつてゆく謎。この不気味さにあなたは耐えられますか…？

ちょっと伏線の入ったホラー小説。

せまい十畳の部屋に無数の蠅燭が灯っている。がらんどうな本棚の中、端に寄せられたちゃぶ台の上、ささくれてガサガサになつた畳の上。至る所で赤や橙にぼうつと光つている。いや、光つていると、いうより光そのものが仄めいているみたいだ。

暗闇の中に蠅燭の灯りから何かが浮き出て見える。よくよく見ると、それは人間の頭で、部屋の真ん中に身を寄せ合つようにしてかたまつていて。五つほど見え、そのうち二つは少女、三つは少年のようだ。無数の蠅燭と彼ら以外何も無い部屋で、それらは何事かひそひそと言つてはいる。彼らが何か言つたびに近くの蠅燭の炎がゆらゆらと揺らめく。そのちらちらとした灯りのせいで、彼らの顔はよういつそう不気味に見えた。

「準備も整つたことだし、そろそろ始めるか。」

1人の少年がぼそりと言つた。

「そうね。早くしないと夜が明けちゃうわ。」

今度は少女が言つた。

「で、誰から始めるよ?」

五人の中で一番大柄な少年が言つた。

「そうだな…。」

1人の少年がふと考え込んで、「じゃあ、この鉛筆を倒してその先にいた人から時計周りに話をしようか。」と提案した。

皆静かに頷く。

言い出した少年は胸ポケットから鉛筆を取りだし、皆の真ん中においた。鉛筆を倒す、たつたそれだけのことを皆息を詰めて見守つた。少年は鉛筆を放し、それは音もなくゆっくりと倒れた。

その先にいたのは1人の少女だった。

「じゃあ、かながらお願ひ。」

もう一人の少女が話しかける。

「1番最初だ。どびきりのを頼むよ。」

大柄なのが言う。

かなと呼ばれた少女はすうっと息を吸い込むと仲間の顔を見渡した。

えつと、これはあたしが体験した話なんだけど、ある日夢を見たの。

あたしは夢の中でジョーンーうちの柴犬ヨーの散歩をしてた。周りは真っ暗だつたけど、あたしは鼻歌を歌いながらジョンと散歩していった。現実でならそんな遅い時間に散歩に行かないし、怖いと感じるのに、あたしは何も気にせずに夜の道を歩いてた。

時間帯は覚えていないわ。どこを散歩してたのかも。しばらく、そうね、20分くらいジョンと歩いてた。そしたらね、いきなりジョンが歩くのをやめたの。ジョン、どうしたの？ つてリードを引っ張つてもちつとも動かない。その時初めて夢の中のあたしはここは何処なんだろうとキョロキョロし始めた。そしたらそこはあたしがいつも現実で遊んでいる公園の近くだつた。いつもは明るくてカラフルな公園が、不気味に見えた。それまでは全然怖くなかったのに。あたしは早く家に帰りたくなつて、「ジョン、何してるの、早く帰ろう。ねえってば。」とジョンを力ずくで引っ張つて、よじよじと歩きだした。でもジョンは金縛りにあつたみたいに動かない。あたしは半泣きになつて、「ジョン、帰ろうよう。」つて言いながら、さらにぐごぐいリードを引っ張つた。今度はどんなに引っ張つても動かない。

すこく怖くつて、もう涙が目になまつてた。泣きながらジョン、つてしまりく呼び続けてたら、いきなり、ひた、ひた、と足音が聞こえてきた。

それだけで心臓が飛び出そうなくらい驚いた。夜中に誰かが散歩してるんだわ、と思おうとしてたら、その足音はだんだんあたしの方に近づいてきた。来ないでよ、と思いながらあたしはその人から目が離せなかつた。目はすっかり暗闇に慣れていて、その人が青いワ

ンピースを着た女人だとわかった。あたしはその女人をじっと見ながら動くことが出来なかつた。ジョンもあたしと同じでぴくりとも動けない。

その女人人はあたしの50メートルくらい手前まで歩くと、いきなりピタッととまつた。何なんだろ、と思つたら、女人人が何の前触れもなく猛スピードであたしの方に走つてきた。

「キヤー……………ツ？」

人間の速さとは思えないスピードで、あたしは逃げることも動くことも出来ずにただ叫んだ。あつという間に女人人はあたしにぱさつと覆いかぶさり、鬼の形相で睨んできた。真つ赤な唇からさらりに真つ赤な血が垂れていて、長い髪はボサボサに乱れていた。目が爛々と緑に光つてゐる。あたしは涙を流しながら魚のように口をぱくぱくとさせていた。女人人はギロリとあたしの目を見て言つた。

「……………ヅクナ…」

「え…？」

女人人がだらんと頭を垂らしたかと思つと、がばつと顔を上げ、

「コノ公園ニチカヅクナアアアアアッ？」

そこで記憶が途切れでて、目を覚ましたときは汗でびっしょりだつた。

あたしは怖くてその公園で遊ばなくなつた。

でもある日、友達が公園で遊ぼうと誘つてきた。あたしはあの夢のせいで怖くて、「ゴメン、無理」と言つて帰つた。

その日の晩、家でテレビを見ていると、買い物に行つてたお母さんがすつ飛んできて、「大変よ、かな？」と叫んだ。

「何が大変なの?」って聞くと、「あなたの友達が公園で…」

……あとはもう分かるよね……?

この話はこれでおしまい。

蠅燭の灯りが、一つ消えた。

一本目・ランニング夫婦

じゃあ時計回りだから、次はゆうじな。

ああ。

えーと、これは俺の体験談なんだが…

ある寒い冬の日のことだ。俺は自転車で塾から家に帰る途中で猫を轢いてしまった。真っ暗な道をライトをつけずに運転していたから、何かがいるということさえわからなかつた。野良だつたらいいけど、と思いながら近寄つて見ると、それは首輪をつけていた。俺は怖くなつて、猫をそのままにして帰つてしまつた。

それから一週間くらゐあと、俺が塾から帰る時間帯にランニングをする夫婦を見かけるよになつた。冬になるとランニングをする人は増えるから、別に何とも思わなかつた。

でも2日か3日くらゐ経つて、あれ、おかしいな、と違和感を感じるよになつた。他のランニングをしている人の横を通り過ぎる時は、息切れの音が聞こえるのに、その夫婦からは音が聞こえない。それどころか、呼吸をしているのかと不安になるほど胸が上下しないのだ。そんなことを思うよになつてから、俺は通り過ぎる時、その夫婦をちらつと伺うなどをするよになつた。

俺は夫婦を観察してこりうちに、彼らの走るスピードがだんだん速くなつてゐるのに気がついた。でも呼吸音はしない。ある日、夫婦の側を横切ると、妻の方が俺をギロリと睨んできた。俺は何だこいつ、とぞつとして、それからその道を通らないようこしようと思つた。

でも、道を変えたその日、俺の目の前にその夫婦が現れた。

その時は何でこいつらがここにいるんだ、とパニックになりかけた。何とかこらえて、スピードを上げて通り過ぎる。通り過ぎた瞬間、夫婦が俺の方を180度首を回転させて振り向いた。んで、猛スピードで俺の方まで揃つて走ってきた。

あ、なんかさつきの話とかぶつてる?まあいいか。

もちろん俺は全速力でこいで逃げたわけよ。追いつかれないように無駄に道を行つたりきたり曲がつたりして、奴らを撒いた。

そして、無事家に到着。

あんときは本当にホッとした。

いつも持つてる鍵で玄関の鍵をあけた。

そして「ただいま」と言いながらドアを開けると、

……奴らがいた。

2人揃つて俺んちの玄関に立つていた。2人とも無表情で俺を見ている。

「え…な、んで…?」

顔面蒼白の俺に奴らはニヤリと笑つた。夫の方が手に何か首輪らしきものを持っている。

そこからまわりへつと俺に歩み寄り、

そして俺は……

あ、ちなみに、この話は俺のじやなくて友達の体験談だった。

そういうて蠅燭の火を消した。

めこの番だよ。

わかった。じゃあ話すよ。

友達から聞いた話なんだけど、その子のお母さんの実家がすごい山奥でね、一年に一回行くかないかって頻度で泊まりにいくの。その子が小学校5年生の頃だったかな、お母さん方のお父さんが亡くなつて、家族でその家に行つたんだつて。その子の家は4人家族で、その子とお母さんとお父さんと当時中学校1年生のお兄ちゃんがいた。

山を幾つか越えてその家に行くと、おばあちゃんが一人ぽつんと縁側に座つていた。その子のお父さんとお母さんはおばあちゃんに何か言いに行き、あんたたちは遊んでなさいことやどもたちを追いやつた。

遊びと言われたものの、兄妹は特にすることもなく持つてきていたゲームをし始めた。お腹が空いたな、と思つて2人は両親とおばあちゃんがいる部屋に行つた。でも誰もいなかつた。2人はおばあちゃんと両親は晩御飯の買い出しにでもいったんだろう、とゲームを再開した。寝転んでやつていたものだから、何時の間にか眠つてしまつた。

その子が田を覚ますとお兄ちゃんがいなかつた。トイレかな、と思つたけどその子はまた寝入つてしまつた。それからすぐだつたのか、それともどれくらいか時間が経つてからなのかは覚えていないけど、ただいまーと両親の声がしてその子は田が覚めた。

おかげり、と玄関にて行く。

「どこへ行つてたの？」

「晩御飯の買い出しにスーパーに行つてたのよ。お菓子も買つてあるわよ。」

「そっか。あれ？ おばあちゃんは？」

「その子はおばあちゃんがいないことに気がついた。お母さんがきよとんとして答える。

「え？ おばあちゃんは買い物には来てないわよ。孫と遊んでるからつておばあちゃんが言うから。」

「え…？」

その時、なんとかわからぬにかど、その子には悪い予感がしたんだつて。

その子は弾かれたようにいきなり家中を走り回つた。お母さんとお父さんはその子の行動にびっくりしてたつて。その子は全ての部屋を見たあと、

「お兄ちゃんがいない？」
と叫んだ。

お父さんとお母さんの表情が凍りつく。

そこからなんだか尋常じやないことについて、家族でおばあちゃんとお兄ちゃんを探し始めた。

「おばあちゃんあーーーん」

「お兄ちゃんあーーーん」

皆ありつたけの声を出して叫んだ。

田舎で家が広いから、探すのは大変だつたつて。その子がお兄ちゃんと叫んでたら、庭の方からかすかに物音がする。

両親を呼んで、庭を捜した。そして釘で打たれた蓋で塞がつている

古井戸から音がしているとわかった。

お父さんが蓋を壊して覗きこむと

「誰か助けて…………？」

と呟ぶお兄ちゃんがいた。

お父さんがロープを垂らしてお兄ちゃんを引つ張り上げて助けた。

「なんで井戸の中になんかいたんだ？」

お父さんが聞くと、お兄ちゃんが

「トイレに行つて、トイレにおばあちゃんがいる？」

と言つた。

でもトイレも捜したけどおばあちゃんはいなかつたよ、とお母ちゃんが言つて、絶対いる！つてお兄ちゃんが怯えているよつて言つた。

皆でトイレに行くと、トイレの灯りがついている。

「わつきおばあちゃんたちを捜したときに洩したはずなのによ……」

お母さんの顔色が少し悪くなる。

お父さんがドアを開けると、

おばあちゃんがいた。

「キヤ――――――？」

お母さんと子の子が悲鳴をあげた。

やににいたのは、

おばあちゃんの首吊り死体だった。

皆じつすればいいか分からず、警察を呼んだ。

警察は死因を自然死と断定した。

そして、死後一週間以上経つていて、とも…。

「おばあちゃんから電話があったの、3日前だわ…」

あとでお兄ちゃんに話を聞くと、おばあちゃんが部屋に入ってきた、遊びまうと言つからお兄ちゃんは一緒に遊んであげることにしたんだつて。そしてついて来てと言われついて行くと井戸の中に閉じ込められた…。

不思議な体験だつたつて言つてた。

トイレもくまなく捜したのに、お兄ちゃんに言われるまで死体を見つけられ無かつたのも不思議だつて。

あと自然死なのに首吊りの形で死んでいたのも…

一応友達に聞いた話はおわり。

フツと短い音がして、蠅燭の火がまた一つ消えた。

次はじゅんすけだな。

最初に言つとくと、俺の話は作り話だ。一部で流行つてゐるふつうに聞くと全然怖くないが意味を考えてみると怖さがわかるつてやつ。知つてる?まあ、とにかく話すや。

俺は学校に明日提出する宿題を忘れてしまつた。しかもそれに気づいたのが夜の11時でさ。怖かつたけど次の日みんなに笑われながらペナルティで校庭10週走るくらいなら、夜の学校に侵入するほうがまだまだつてことで取りに行つた。

夜の学校はやっぱり怖くて門の前に来てから帰らうかと思つたくらいだ。

でもここで帰つたらただのビビりだつてことで、フーンスを乗り越えて学校の中に入った。

学校の中は真つ暗で、廊下を歩いてこるとやたら自分の足音が響いた。俺の教室は一階にあるから壁伝いに階段のとここまで歩いて行って、ゆっくり階段を上つた。

階段をのぼりながら、俺はクラスで噂になつてゐる音楽室の呪いといつ怪談を思い出してしまつた。一階にある音楽室から午前0時ちょうどビビリピアノの音と悲鳴が聞こえてきて、その音につられて音楽室を覗きそれを見てしまうと呪い殺されてしまう、という話だ。俺はこつこつには興味がないんだが、クラスの女子のYに無理やり聞かされてこの話を知つた。Yは美人でピアノもうまいのに、こつこつ話が好きでやたら怪談話を提供してくれるといひはどつかと思つ

んだ。くだらないと思ひながら俺は足がすくんでしまつた。なんでこのタイミングでの話を思い出しちゃうんだよ、と自分を呪つた。階段をよひよひ半分上つた。

もしかして、と俺はよせばよいになんとなくライトをつけて腕時計を見た。

午前〇時ちょうど。

ぞくつと背筋が凍つた。

音楽室の前を通りたくなかったが、俺の教室には音楽室の前を通りないとたどり着けない。

階段を上り終えて、また壁伝いに廊下をゆっくり歩いて行った。もうすぐ例の音楽室が見えてくる。

心臓が壊れそうなほどバクバクいっている。俺はいつの間にかじつと汗をかいていた。

自然と足が止まる。

落ち着け、そんな音聞こえるわけないじゃないか、呪い殺されるわけ、ないじゃないか。

俺はじくじくと音を立てて睡をのみ、そろそろと足を一步踏み出そうとした。

？？？？？？？？？？？？

「…………え？」

俺は思わず声を漏らした。

こんな夜中にピアノの音…？誰が？

まさか…………

次の瞬間キーッといつよつた甲高い音が聞こえてきた。

これは、例の、悲鳴…？

俺は少しも動けなかつた。

でも、なぜだろつ。怖いのに俺はすたすと歩いて行つて、音楽室のドアを思い切りあけた。

がらりと音を立てながら開けると、ピアノの音がぴたりとやんだ。そしてぱつと明かりがついた。

俺はびくじと体を震わせた。

明かりをつけたのは、趣味の悪い真つ赤なTシャツを着た俺の担任の音楽教師だつた。

「あれ、先生？」

俺は拍子抜け、間の抜けた声を出してしまつた。先生は大きな立派なグランドピアノの前に立ちはだかる体で、ポケットに手を突つ込んで立つていた。ピアノは大事そうにほこりよけの布を足までかけられている。

「おや、Ｋ君じゃないか。びうしたんだい、こんな夜中に。」

「明日出す宿題を教室に忘れちゃつて……。ピアノの音が聞こえたから誰かいるのかなと思って。」

「そうかそうか。怖いだろつ。今教室のカギを持っているから開けてあげるよ。そして早く帰りなさい。」

「ありがとうございます。先生。」

俺はかなりほつとした。

先生は教室のカギを開けてくれて、俺は無事宿題を持つて家に帰つた。

さあ、これから徹夜で宿題だ。

次の日、宿題は朝のホームルームで回収された。結構宿題忘れたやつが多くて、怖い思いして学校に取りに行つた俺は何だつたんだよとちよつとがつくりした。

「ほら、早く席に着きなさい。」

先生がみんなに向かつて言つ。今日は普通の真つ白なTシャツだ。
奥さんにでも趣味の悪さを指摘されたのかな。

「今日は誰も休んでないな~」

「あ、先生~、Yさんがいませ~ん。」

「はい、Yが欠席つと。」

いつもの朝の風景だつた。

音楽室の呪いなんてないつてわかつたし、すがすがしい朝だなど俺
は眠い目をこすりながら思つた。

… そんなに怖くなかったかな。

まあいいや。

ふつと息を吹きかけ、ろつそくの火を消した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4350x/>

百物語

2011年10月31日20時25分発行